2025/2/23　　「 主イエスの告白 」　　ルカ 22:66-71　　さ 66 せ 606(650)

創立記念月間も最後の週を迎えました。寒暖の差が激しく、ついていくのがやっとという感じですが、福寿草や寒紅梅が咲き始め、レンテンローズのつぼみも見え始めています。新しい 79 年が主の祝福を表す年でありますように祈ります。

逸脱行為

人間社会は、古代も現代もルールを守ることが大原則です。けれども残念なことは、そのルールを守れない人間の性もまた、変わらないということです。「無理が通れば道理が引っ込む」と昔の人は言いました。権力者たちは、自分たちの計画を実現させるために、姑息な手を使い、必要な段取りを取りません。聖書の中でさえも、それは同じなのです。愛と正義を貫くことこそ、最も偉大なことである、と証しする聖書の中で、その神の大祭司によって構成される「最高法院」が、何の罪もないはずのイエス様を、冒涜罪で処刑しようと決議したからです。

きっと最高法院の人々は「だからこそ、イエスは間違った男だったのだ」と言い張ったでしょう。「これが神の審判なのだ」という者すらあったかもしれません。自己正当化、自己防衛の典型的な姿です。イエスよ、もっと謙れ。自分の誤りを認めよ。我々を敬え。自分たちが侮辱し、目隠しし、尊厳を傷つけておきながら、なんと身勝手な態度でしょう。

私たちは、神様に敵対する存在であると聖書は語っています。うまくいかないのは神様のせい、自分は間違っていない、あの人があんな目に遭うのは自業自得、周りが悲しんでも苦しんでも自分は関係ない。偉い人がしっかりしないから社会が腐る。そんな誰もが思うことは、全て罪であると聖書は語ります。神の愛と正義を、その人が実現しようとしないからです。イエス様はその言葉の故に、十字架で殺されました。

主イエスの告白

殺されたアンネの日記や、教会に弾圧されたトルストイの小説、それ以上に私たちは、十字架で死なれたイエス様の言葉に耳を傾けなければなりません。「今から後、人の子は全能の神の右に座る」これこそ、信仰によって事実を圧倒し、勝利を疑わなかった、イエス様の告白です。この言葉によって、私たちは自らの罪を悔い改めて、救いに至る道が開かれていることを確信することができます。すなわち、絶望的な中にあっても、愛と正義である神様につながれるという、信仰の恵みです。

この告白で、即座に祭司たちが悔い改めたり、十字架刑が中止されたりするほど、世の中は甘くありません。しかし、その漆黒の闇の中で、主イエスの言葉は、私たちの消えない希望となって輝いています。その先には、復活と永遠の命という思い浮かびもしないような神の計画が進められています。悩みの中で私たちを救い出すのは、このイエス様の告白です。これを自らの告白とするなら、なんと幸いでしょう。